

目

加藤清正

加藤清正
編

加藤清正公

東京指針社發行

257

8
937

加藤清正公

(〜調。四分ノ二拍子)

入江好治郎作曲



5. 1 3. 3 | 3. 2 1 2 | 3. 5 5. 3 | 2. 0 |
 (1) サチ ナキ イヘニ マハイテ



8. 1 6 1 | 2. 2 2 2 | 3 5 | 1. 2 3 0 |
 ヲ ノ ナ タ チ マ チ ニ タ カ ク



6. 6 6. 6 | 6. 6 6 | 5. 5 1. 2 | 3. 0 |
 イ タ サ ノ ニ ハ ニ キ マ タ バ



2. 3 2. 1 | 6. 1 6 1 | 2. 3 3. 2 | 1. 0 ||
 イ ▲ カ フ テ - キ ヨ ナ カ リ ケ

加藤清正公

犬童信藏作歌

一、 幸なき家に身は出て

其名 忽世に高く

戦の場に君立てば

い向ふ敵もなかりけり

二、 君豊公に仕へては

忠義鬼神を泣すべく

遠く幼主を衛りては

意気鐵よりも堅かりき

三、 國威を異域に照さんと

君三軍を指揮すれば

行手の敵は吹く風に

靡く小草に異ならず

四、 哈浪海外沖遠く

東の空を拜みては

孤軍異境に攻め入りし

鎧の袖に露重し

五、彼の三韓の幼子が

鬼將軍の名を聞けば

忽泣を止むてふ

威名は今も輝けり

六、巨岩を積みて築建てし

類稀なる大阪の

城の松が枝吹く風は

君が功績を謳ふなり

七、見よ西南の戦に

食むに糧なき熊本の

孤城の守支へつゝ

國の危急を復したる

八、高き武功は其上古の

君が遺物の城ゆゑと

雲居にそゝる銀杏の

梢遙に仰ぐかな

九、名古屋の城の棟高く

光る黄金の鏡は

幾代の末の果までも

輝く君が響なり

一〇、緑白川球磨川の

水理の業に開拓に

富國の道を計りたる

跡は今尙見らるべく

一一、君が遺徳は金峯の

麓の松の木がくれに

たゞく太鼓の夜も晝も

絶えぬ響に聞かるべし

一二、を指を折れば三百の

年の數々積り來て

愈高き其いさを

仰げば尊と錦山

加藤清正公

(ハ調。四分ノ四拍子)

入江好治郎選曲

拍子ヲ速カニ

5. 5 3 1 | 2 1̣ 6̣ - 6̣ | 5 1 2 3 | 5 2 2 0 |

1) カ イ タ イ ム 雙 - ノ メ イ 城 - ト シ ヲ

5. 5 3 1 | 2 1 6 6 | 5 I 3 2. 3 | 2-1 0 |

要 - ガ イ ケ ン コ ノ ギ ン ナ ン - 城 -

5. 5 1. 2 3. 3 2 | 5. 5 3. 1 2 - | 1. 2 3. 5 6. 5 3 | 2. 2 1. 6 5 - |

ルキヘキタカク ソバダチテ ルキヘキタカク ソバダチテ

5. 5 5 5 | 6 6 5 - | 3 3 1. 2 | 2 - 0 |

ゲ ニ サ イ カ イ ノ ユ ヲ チ ント

3. 3 2 2 | 1 1 6 6 | 5 1 3. 2 | 1 - 0 ||

ア フ ガ ヌ ヒ ト コ ソ ナ カ リ ケ レ

加藤清正公

本多龜三作歌

一、海内無雙の名城として

要害堅固の銀杏城

壘壁高く峙ちて (再唱)

實に西海の雄鎮と

仰がぬ人こそなかりけれ

二、勇猛無比なる清正公を

史傳の鑑に照し見れば

血あり骨あり涙あり (再唱)

三、實に梅檀は二葉にして

其香餘木に勝るとかや

未だ二十年の初陣に (再唱)

敵の勇士の首とりて

主の感狀得たりけり

四、頃は天正十年とかや

.....(五).....

.....(四).....

有所權作著

刷印日四十月二年二十四治明

行發日七十月二年二十四治明

(錢五金價定)

編者

音樂研究會

發行者

前川一郎

印刷者

橫田五十吉

印刷所

橫田活版所

發行所

學海指針社

東京市日本橋區通旅籠町十一番地

東京市神田區松下町十番地

東京市神田區松下町十番地